

富山市立図書館

図書館だより

第59号
2013.8

史料からたどる富山歴史探検

富山市立図書館館長が、歴史史料の解説に取り組んだ経験をもとに、江戸時代の富山町の治水事情をひも解きます。史料をたどりながら、江戸時代の富山町をしばし旅してみませんか？

富山町の橋とゴミ

～『町吟味所御触留』を読む～

富山市立図書館館長 加藤達行

「富山町中橋」は???

昨年、グループで『町吟味所御触留』という史料集を輪読する機会を持ちました。久しぶりに学生時代にタイムスリップしたような、楽しい時間を過ごすことができました。しかし、目で読むのとは違い声に出して読むと、動詞をおかしな活用にしたりして四苦八苦でした。

ところで、『町吟味所御触留』というのは、10巻15冊の史料です。(※1) 解説によれば、「享保2年(1717)より元治2年(1865)までの約150年間にわたる、富山藩寄合所からの達書を町奉行所がまとめた記録で、江戸中後期の富山町の動向を窺える史料」です。平成4年には、近世文書を読む会の方々が解説され、高瀬保先生が編者となり桂書房から『越中史料集成第4巻』として出版されました。この本をテキストとしました。(※2)

約4ヶ月にわたり輪読を続けた中で、印象に残った文書の一つを紹介したいと思います。



『町吟味所御触留』(部分) 富山県立図書館蔵

宝暦5年(1755)7月26日付の「富山町中橋の下へ塵芥捨てぬ様申渡書」という文書です。これは富山藩の普請奉行から町奉行に宛てたものです。内容を要約すると、「富山町中橋の下へゴミを捨てるので、雨天の時水がつかえるから、これ以後ゴミを捨てないようしなさい。町奉行からも丁役人にゴミを捨てぬように言っていると思うが、ゴミを捨てるので洪水のとき水が溢れています。(きちんと丁役人に命じてくださいよ!)」というものです。

私は「富山町の中橋」はどこかと調べてみましたが、わかりません。なぜ、「中橋」と考えたかといえば、次のとおりです。藩主やその家族が天満宮(現

※1 富山県立図書館「前田文書」所蔵。

富山県立図書館文書コレクション <http://www.lib.pref.toyama.jp/collect/coll01.html>

※2 『町吟味所御触留』越中資料集成4 高瀬保/編 近世文書を読む会/解説 桂書房(1992年)

在の於々多神社)へ参詣するとき、通行する道筋を町年寄から町民に知らせていました。この道筋では、いたち川にかかる現在の雪見橋を「表ノ橋」、現存国道 41 号線となっている月見橋のやや上流に架かった橋を「裏ノ橋」と称していました。このため、「中橋」はどこかと思案したのです。

困ったな！2 日ほど悩んでいたとき、ふと気づきました。「富山町の中橋」ではなく、「富山町中の橋」と読むべきだったのです。「富山町中橋」とは、富山町のすべての橋なのでした。グループの皆さんとの輪読のとき、私と同じように「富山町の中橋」と読んだ方が何人もいたので、少しは安心しました。

史料からよみがえる富山町のすがた

富山町にはどのくらい橋があったのかと、天保 12 年 (1841) の富山町を町ごとに住民数や竈数 (家数) などを記載した史料の『富山町方旧事調理』(※ 3) にあたりました。この資料には町ごとに橋についての記載があり、整理すると、橋の数は 170 あまりになりました。しかし、これらの橋の建築費用は、「御上御普請」、「丁内普請」、「会普請」など、負担方法に違いがありました。たとえば、「出会普請」で建築された、河端町と中嶋町の間に架かる橋についてはこう記されています。

- 一、出会普請橋 壱ヶ所 中嶋町、河端町出合
曲尺 五歩 河端町
五歩 中嶋町

このように、隣り合う町同士がお金を出し合って作ったものもあったのです。このような「出会普請」は、2 町内だけでなく、5 町内で負担を分け合っているものまでありました。結果、富山町の橋の数は、正味 130 くらいになります。

当時、富山町全体に水路がめぐり、多くの橋が架けられており、ゴミが橋に引っかかり、大雨のたびに水がついていたことが想像されます。また、中心市街地の再開発に伴う発掘調査によって、町人地と背中合わせの武家地の境の設けられた「背割下水」

や、市街地の水路や河について記された遺構が確認されています。さまざまな古地図にも、富山町には多くの水路が縦横に走っていたことが描かれており、大雨によって水が溢れたということは納得できます。

しかし、このような水路も、明治時代に道路に火防水路が作られたり、その後、地下の下水路として整備されたりして、地上で見えることはできなくなりました。今、現代の都市型豪雨に対処するため、私が働く図書館横で貯留管工事が始まっています。ちょっと騒がしいですが、水との格闘は続いています。



古写真 富山市街防火線路 (郷土博物館蔵)

ひとつの史料をきっかけに、少しだけ昔の富山町の様子を探る旅をしました。江戸時代から、人々は大切な文書を書き写して残してきました。また、時々町や村の実態を調査した記録が残されています。毛筆で書かれた古文書、記録はなかなか厄介ですが、現在、私たちでも読めるよう活字化した書籍も多く出版されています。字をそのまま活字化しているので、専門的で面倒ではありますが、歴史をひも解く貴重な資源なのです。

おわりに

図書館は、後世に本を引き継ぐことも大切な仕事としています。しかし、4 月に着任して、私が日々目にするのは、残される本ばかりではありません。多くの人に読まれ、傷んで、廃棄される本もあります。それぞれの本の一生です。これからも、そんな本の一生を見つめていくことにします。

※3 富山県立図書館「前田文書」所蔵。また、『富山市史第 4 巻』にも収録されている。

間近に迫る宇宙への旅

今年8月22日、JAXAが開発する新型ロケット「イプシロンロケット」の打ち上げが予定されています。従来、ロケットの打ち上げには多大な時間が必要でしたが、イプシロンロケットはシステムの革新により、わずか1週間で打ち上げの準備が可能になりました。

日常的にロケットの打ち上げが行われる時代が迫りつつある今、宇宙旅行に関する本を手に取り、思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

『銀河鉄道の彼方へ』（高橋源一郎著、集英社2013）は、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を、著者独自の世界観で語った物語です。

宇宙船から失踪したジョバンニの父が残した「あまのがわのまっくらなあな」という言葉、猫とともに単身宇宙の果てへと旅立った男の手記、ジョバンニがふと気がつくに乗っていた『列車』でのさまざまな出来事…。いつのまにか不思議な世界観にどっぷり浸かってしまう作品です。いつかは銀河鉄道に乗って、宇宙に行くことができるかもしれません。

次に、現実的な宇宙旅行について紹介します。



『宇宙旅行はエレベーターで』
ブラッドリー・C・エドワーズ
フィリップ・レーガン/共著
オーム社 2013

この本では、地球と宇宙をエレベーターで行き来することのできる「宇宙エレベーター」の実現に向けての活動や、建設後の宇宙開発について紹介されています。

一見SFの世界の乗り物で、実現不可能なものと思われるかもしれませんが、日本においても「一般社団法人 宇宙エレベーター協会」をはじめとした

機関により、実現に向けた技術開発が進められています。本書によれば、宇宙エレベーターは現在のロケットに比べて、宇宙旅行の費用を95パーセント近く引き下げる可能性を秘めているとのこと。わたしたちでも気軽に、エレベーターに乗って宇宙を旅できる日が、まもなくやってくるでしょう。

しかし、ロケットや宇宙エレベーター、あるいは鉄道で気軽に宇宙を旅することができるようになったとしても、ひとつ心に留めておかななくてはならない問題があります。それは「宇宙酔い」です。



『どうして宇宙酔いは起きる？』
森滋夫/著
恒星社厚生閣 2012

この本は、過去の宇宙飛行士たちの3人に2人が発症し、苦しめられたという「宇宙酔い」について、メカニズムや防止法の研究をまとめたものです。

地上での乗り物酔いとは関連がないため、かかりやすいかどうかは宇宙に行ってみないことにはわからないという宇宙酔い。宇宙空間での実験には制限があるため、まだ詳細なメカニズムは解明されてはいません。しかし多くの症状は4〜5日ほどで自然に回復するようです。宇宙旅行を楽しみ思い出するためにも、宇宙酔い研究の更なる発展が望まれます。

旧ソ連が史上初の有人飛行を行ってから半世紀が経過しました。宇宙開発は加速度的に進み、宇宙ステーションに宇宙飛行士が常駐できるまでになりました。宇宙旅行を通してわたしたちが宇宙の謎を解明する日も、そう遠い未来ではないでしょう。

（本館・清水）

レファレンスあれこれ

Q. 岩瀬の北前船「長者丸」の漂流事件について知りたい。

A. 富山に関わりのある事柄を調べる事典として、『富山大百科事典』(北日本新聞社 1994)、『富山県大百科事典』(富山新聞社 1976)がある。それぞれ「長者丸」の項目を見ると、同船は江戸時代、太平洋を漂流しアメリカの捕鯨船に救助された北前船で、西岩瀬を母港としていたことがわかった。

『富山大百科事典』には参考文献として、『時規物語(とけいものがたり)』『蕃談(ばんだん)』の二書があげられていた。これらについて調べてみると、いずれも、帰国した乗組員に直接取材した江戸時代の記録書であり、『日本庶民生活史料集成 第5巻 漂流』(三一書房 1973)に収録されていることがわかった。両書ともに図版を多く収録し、乗組員の仮寓先であったハワイ・オホーツク等における現地の風俗が豊富に掲載されている。漂流の経緯もさることながら、鎖国時代の日本人の目に、海外の様子がどのように映ったかを知る手がかりとなる。これらは文語表記であるが、『蕃談』は現代語訳されたものが、『蕃談 漂流の記録1(東洋文庫 39)』(平凡社 1965)として、別に刊行されている。

また、『富山県大百科事典』には、文豪・井伏鱒二はこの事件を取材し、『漂民宇三郎(講談社文芸文庫)』(講談社 1990)を書いたとの記述がある。同書は『時規物語』『蕃談』を基にしているが、主人公の乗組員・宇三郎は、架空の人物であり、ストーリーにも創作部分が見られる、独自の作品である。

次に、「北前船」をキーワードに資料を探した。『漂民次郎吉 太平洋を越えた北前船の男たち』(福村

出版 2010)は、「歴史ドキュメンタリー」として小説風にかかれた作品である。事件の全体像が読みやすく描かれている。

『北前船長者丸の漂流』(清水書院 1974)は、『時規物語』を分析し、考証を加えた研究書である。「第5章 幕末日魯交渉史との関連」「第6章 幕末日米交渉史との関連」においては、オホーツクで乗組員たちと遭遇したイギリス人の回想録など、外国人側の記述と、『時規物語』の記述を照合し、両者の視点から、幕末期日本の対外関係を明らかにする試みがされている。

さらに、岩瀬の郷土史に関する資料を調べてみた。富山市岩瀬地区には、郷土史研究グループ・東岩瀬郷土史会があり、『東岩瀬郷土史会会報』を定期的に発行している。その中に「次郎吉漂流の物語 一幕末にハワイ、ロシアを見た『長者丸』の乗組員一」(第8号 1983)、「長者丸の漂流と富山売薬薩摩組」(第47号 1993)といった、長者丸漂流事件に関する論文が掲載されている。これらはのちに『東岩瀬郷土史会会報合本 第1分冊～第3分冊』(東岩瀬郷土史会 2007)に再録された。富山の郷土史研究雑誌には他に『富山史壇』等があるが、これらには単行本に収録されていない論文が多く掲載されており、郷土史に関連する事項を調べたい場合には、一見の価値がある。

また、富山市郷土博物館が平成23年に、この長者丸漂流事件を読み物風に扱った、『春の曙 徒然はなし』と題された江戸時代の写本を入手し、新発見資料として話題になった。当時からすでに、世間の注目を集めた事件であったことを示す資料といえる。

(婦中図書館 舟山)